

キャンバスの油彩画における下塗りの効果について

自身の最近の研究では水性白亜地キャンバスを用いた制作の過程において、地塗り層の上にシルバーホワイトによる下塗りを施し、その効果の検証実験を継続しておこなっている。

これまでの研究において、水性白亜地キャンバスに施した下塗り層と、さらにその上に施す描画した絵具層同士の固着の強さの向上効果や、描画層の絵具の色の発色が良くなるという顕著な効果が認められた。それ故これらの結果から判断して、水性白亜地キャンバスに下塗りをおこなうことは、作品制作のプロセスにおいて非常に有効な方法であると言える。

一方、水性白亜地キャンバスと比較して、市販されている油性地キャンバスにおいては、白色顔料(この塗料の組成は不明であるが、おそらく酸化チタン顔料と炭酸カルシウム等の体質顔料とともに展色剤である油脂が混合されたものではないかと推察する)が地塗りとして塗布されているが、この種のキャンバスが先に述べたようなシルバーホワイト絵具等の下塗りによって画面の堅牢性が向上するかは今のところ不明である。

その理由として、第一に、先に述べた市販の油性地キャンバスに施された白色の塗料自体が非常に強靱であることが挙げられる。このことは、展色剤としてアルキド樹脂のような化学合成されたものが使用されている可能性が有る為である。

第二に、油性地キャンバスに施された白色塗料の表面が緊密で吸油性が乏しいと思われる。それ故、その上に塗布された絵具との結びつきが不安定になっていると考えられる。ただし、油性地キャンバスと下塗り層間の固着は充分ではないが、発色の向上には効果が期待出来ると考える。

作家によっては、表現方法としてキャンバスの白色の地塗り層を残したままで完成としたりする。また、そのような作品を数多く目にする。表現としてこのような制作方法をとることは、自身の制作者としての立ち位置からは共感できる。しかし、作品によっては塗り残された生のままのキャンバスの白さと絵具で描画された部分とがアンバランスで、画面の緊張感を欠いて見える作品に出会うこともある。

一般に、油彩作品の制作に用いられている市販の油性地キャンバスに塗布された白色塗料は、光の屈折率はそれほど大きくない。同様に、水性の白亜地キャンバスも描画する前は白く見えるが、一旦油分を吸収すると光の屈折率は小さくなってしまいグレーがかった白色に変化してしまう。さらに、光の反射率においては、麻布の織目の凹凸が光を分散・吸収してしまう為に低下する。

これに対して、同様の表現をキャンバスの代わりに白い

紙を支持体として用いられていたならば、画面の見え方はキャンバスの場合とは異なっているのではないだろうか。

作品の完成時において、仮に描画をしていない紙の白い部分が残されていた場合、その見え方は油性地キャンバスあるいは水性白亜地キャンバスの生のままの白い部分と比べて、遥かに白い面としての緊張感や強さを感じられる。このことは、基底材として紙そのものが単一の原材料だけで作られており、紙の表面から裏面まで細かい繊維によって高密度に集成されていることに起因していると考えられる。さらに、紙の表面の光に対する屈折率や反射率の高さも一因であるだろう。

上記のことから考えて、水性白亜地キャンバスや市販の油性地キャンバスを用いる場合、それらの地塗りされた面の光の屈折率や反射率を向上させる為には、キャンバスの表面に何らかの白色絵具による下塗りを施すことが必要であると考ええる。

今年度の東京都美術館の企画展示で藤田嗣治の大規模な展覧会が開催された。私も作品を観る為に展覧会に足を運んだ。

以前から、倉敷市にある大原美術館所蔵の藤田嗣治の作品は何度か目にはしていたが、今回のように多くの作品を一堂に会して観る機会は初めてであった。

藤田嗣治の作品から感じたことは、下塗りの大切さとその効果であった。特に人物の表現では乳白色の下塗りを生かして簡潔な描写で表現されており、絵具の色彩の発色や冴えが際だって見えた。

あるテレビ番組で藤田嗣治展についての解説が放送されていた。その中で、藤田嗣治が若い頃に日本で学んだ日本画等の紙に描く経験や知識が油彩画に生かされているというような内容のことが語られていたが、まさにそのとおりであると感じた。

西洋の油彩画でも古くから多くの作品でシルバーホワイト等による下塗りは施されていたが、その目的の多くは描画層に対する発色や輝きの向上や画面の中での明るさを表現する為の使用が主なものである。藤田嗣治の作品のような表現をする為の下塗りの利用法は非常に参考になる。藤田嗣治は日本人独特の感性を大切にすることで、このような表現技法に至ったのだと理解出来た。このことは先に述べたように紙の組成とその効果を油彩画のキャンバスに巧みに応用して描かれている非常に分かりやすい例ではないだろうか。

私自身、現在の制作においては、下塗りを作品の堅牢性や絵具の固着の向上、発色の向上のみならず、完成時の最終的な描画層としても利用し生かすことを意識し始めている。